

リンダ フィッツジェラルド

アイルランド出身の元カトリック信者 (3/4)

:

明:リンダはヒジャブを着けることの内的葛藤について ります。

目:[事新改宗者ムスリムの逸 女性](#)

より: リンダ フィッツジェラルド

日 19 May 2014

集日 19 May 2014



私の いていた病院はしばらく新 用をしていませんでしたが、6月になると突然始まり、私が することの出来る が2つ募集されました。一方は人事部で、もう一方は教育 研修部でした。私にはどちらに行くかの 肢があり、双方の 任者とも私を く していました。もしも人事に入れば、私は物事の中心に位置し、病院で起きていること全てを把握し、将来的にはより多くの昇 の 会もあります。もしも教育部に入ったのなら、より多くの人々が私がムスリムになったということを知る可能性が高まり、私は を覆い さなければならなくなるでしょう。私はどうすべきか何 も思い み、やきもきしました。突然、物事の中心にいること、そして病院で起きていることを把握し、 い役 にいることが私

にとって非常に重要なことに思いましたが、何かが私を押しとどめていました。すると私のヨルダン人の友人が、夜の礼拝に2ラクアの礼拝を捧げて神のおきを1いうようアドバイスしてきました。それを数日に渡って試してみましたが、はっきりとした答えはまだ分かりませんでした。心の奥底では教育部に行きたいと思っていることは分かっていたのですが、私は自分の中で葛藤していました。人々が私がムスリムであることに付くことや、彼らにそのことで直面することを怖れていて、もし人事に行ったときに手に入れることの出来る力な役にする思いもえず浮かんでいました。そしてある夜、クルアーンを読んでいたとき、お金やゴシップ、力などは私にとって何の意味もなくなりました。、私はそれらに意味を出してはいませんでした。そうであるなら、どうして今更突然それらが魅力的になったのかと思うと、シャイタン（魔）が私をそそのかそうとしていたからだと思います。なぜなら、もし私が教育部に行けば、そこにはより多くのムスリムたちがいることから、シャイタンは私がサポートを受けてより宗教的になることを知っているからです。するとモヤモヤしていたものが取り除かれた感じがし、私は意して、上司にそのことを伝える明日が来るのが待てなくなりました。そしてもちろん、私は教育部に入ったのです。

ヒジャブを着ける

その、物事は急速な展開をみせました。私はモスクで礼拝し始め、教育部ではたくさんのサポートを得ました。それから事に付いた私の（宗教に格な）上司が、私のを覆うようめてくるようになりました。私はそのことについて真にしなければならなくなりました。私はった理由でそれをしたくはありませんでした。私はそうする心のが整い、そうすることをして止めたくなくなるようになるまで待っていたのです。その上司が休暇を取り、プレッシャーは一旦なくなりましたが、私はまだそのことについて四六中考えていました。私はヒジャブを着けることとその理由について友人と常にしていましたが、依然として得出来ていませんでした。

ある末、私がコンパウンドの友人の家にいるとき、新入りの女性たちが来て会をする会がありました。彼女らは素な人柄であったため友になりたいと思いましたが、「ああ、新入りの子たちが来始めたのか。どんどん状況はしくなって来てるわね。ひょっと

すれば、もし彼女らが最初から私がヒジャブを着けているのを れば、それをそのまま受け入れて何も疑に思わないかも知れないわ」こうして翌日から、私はヒジャブを着けることを 心しました。以下は私の日 からの です。

「私は明日から を覆うことにしたわ。私の半分はそれが正しいタイミングだと感じているものの、残りの半分はそんなこと にダメだって叫んでいる。私はその半分を することにした。何をすべきかを知ることはとても しいわ。もしそれを翌日か翌 になって毛嫌いするようになったらどうしよう。そうなれば、皆からの尊敬心を失うことなくして りすることなんて出来ないわ。私はいつになれば100% 信するのだろう。私はいつになれば今の状 よりも 信出来るようになるのだろう。私は思い切ってやってみなければならぬ。神がそれをお望みなら、なんとかなるということを信じなければならぬい。

私はパニック状 になっている。助けて！ 私は本当にこの宗教を信じているの？

私は本当にこのような人生を みたいの？ 私は 、 末ひとりぼっちで ほしいの？

助けて！ 神よ、なぜこんなに困 なの？ どうして私はこんなに意 地なしなの？

29 にもなって、5 のように振舞っている私。今ここで全く 断を下すことすらままならないのに、私は 去にどうやって色んなことを 断したのかしら。私は善良な人 ですらなく、良い人であるかのように振舞うだけで本当に苦 するのよ。今この瞬 、私はこの国を脱出してディスコに行って踊り狂い、お酒を み、叫び声を上げつつ歌い出したい 持ちよ。私は残りの人生で 酒はおろか男友 を持つことも出来ず、 を さない限りは外出も出来ないという事 に直面出来るだろうか。もしも今ここにケイトがいたら、彼女に してマルガリ タを作ってもらわ。でも彼女はいないのよ！

どうやら今 、 魔たちは残 して私に きかけているようね。人々は私のことを思 深い人物だと思っているというのに。本当に笑わせるわ。

私は めたわ。やってやる。やらなきゃならない。最低でも私は自分の愚かさに 付くか、あるいはもしかすると正しい をしたこと、正しい道にあるということ を 感ずるかも知れないわ。インシャ アッラ (神の御意であるならば) 。」

その夜は一も眠ることは出来ませんでした。最の瞬まで、私は勇を出すことなんて出来ないと思いでいました。しかし、扉から出る直前、私はそれを着けたのです。りはしませんでした。

すべての疑念は振りわれました。あたかもシャイタンが私から去っていったかのようでした。私はりに思いました。私は自分が巨人になったかのようにしていました。皆が自分のことをムスリムであることを知ってほしいと思えてきました。私はムスリムであることにりを持てたのです。私は正しいをしたこと、そしてそれにして悔することはないと信しました。スブハナッラ（神にえあれ）、神はそれを容易なこととされたのです。

脚注：

1

者注：ムスリムが物事のにんだ、神のおきを求めて祈る「イスティハラ」の礼のこと。

この事のウェブアドレス：

<https://www.islamreligion.com/jp/articles/116>

著作 2006-2015 断を禁じます。 2006 - 2023 IslamReligion.com. 断を禁じます。